

# とんと昔あったと —語り部の想い—

谷坊 貴美子

聞き手・新谷果子 佐賀香奈美 (石川県立能登高等学校2年)

## 自己紹介

こんにちは。私は谷坊貴美子と申します。昭和10年10月24日生まれで、もうじき80歳になります。私は輪島市町野町桶戸というところに生まれ育ちました。20歳に結婚し、子どもは男の子2人、女の子1人です。長男は津幡に住み教員として暮らしており、次男は会社を継いでくれ、娘は鶴来の方で福祉の仕事に従事しております。成人した孫が3人おりますが、子ども孫もみな昔話や民話は夜、床に入り眠りにつくまで、時々、聞かせておりました。

## 幼少期

私の子どもの頃の家族は、おじい、おばあ、お母ちゃん、私と妹と弟の6人でした。私の小さい頃は戦争中で、父は私が幼いころ出征し、それっきり帰っては来なかったん

です。その頃の私は「この子は10歳ぐらいまでしか生きられんぞいね」と、寺の和尚様が言われるほど体が弱かったんやと。そこで、おばあは卵が一番栄養あると思ったのかな、いつも卵を炊いて食べさせてくれました。その時代は食べ物の不足な時代やったのに、お陰で10歳までのはずが長いこ



自宅のいろりの間にて





子どもたちに語るるとき等に使う紙芝居

と生き延びさせてもらいます。

家族が囲炉裏の周りに集まると、孫達にせがまれて、おじやおばは、たくさん話をしてくれました。おじは、私達を良い子にしようと思うてか、昔話を、ちょっとし当てつけた話にして聞かせたんじゃないかなと思う節の話もありましたが、みんな集まる囲炉裏の火種は必ず絶やさんようにしてありました。

その当時の遊びはケンケンパーとか、お手玉、おはじき、手毬、全部手作りでしたよ。手毬などはおばが、ゼンマイの綿に、糸をかつちり巻いて作ってくれたがを、大事に使いました。

## しきたり

あなたがたは何かをしようと思うたら、何でも出来る良い時代に生まれたんやと思うね。例えていえば私達の時代は女性が自分で会社を起す人っていなかったから、「女のくせに仕事始めて」と、思わんことしないことまでも陰口をいわれるしね。ほやけどそんな時は耳に栓をして、なるべく聞かんようにし、心の中では「次に生まれる時は絶対男に生まれよう」って思うとったがや。

今の時代でももちろん女性は何でも自由だとはいえませんが、思うたことは実行に移すことの可能性は高いと思います。昔は結婚をするにしても、この家とあそこの家じゃ釣り合いが、どうこういうて、地主の人は地主のそこへ、小作なら小作のそこにと、大抵それに従うたもんです。制度じゃないけどしきたりちゅうもんかね。両親や家族の人がルールを敷いてくれるんで、そこを歩くだけのものやったかも知れんね。あなた達は本当に良い時代に生まれてよかったね。前に、私と友達の人やけど、田植え時期に朝早うに赤ちゃん寝かしたまま、田んぼへ苗とりに行ったんやと。その間に赤ちゃんが目覚まして泣きやまんもんで、赤ちゃんのお父さんがおんぶして、田んぼに出てきたんやて。ほしたら姑のおかかが、水蹴って苗代から上がってきて、「男が赤ん坊おぶってきて在所の人に見つかると恥ずかしい」というて、もぎとるようにして家へ連れてしもうたと。そういう時代やったんや。お姑さんのいわれたことも、今にして思うと良いことも確かにいっぱいあると思うけどね。

## 語り部を始める前

高校卒業してから役場にしばらくお勤めしました。嫁に来てから簡易郵便局を少し手伝い、家が農家だったので農業と子育てをしておりましたが、昭和42年春頃から、現在の仕事とは違うサケ・マスの網づくりの仕事をして、10人前後の人数で始めたんやわ。きっかけは、小学校の役員会に行ったら「授業参観には、おじいちゃんやおばあちゃんばかりでお父さんやお母さんが少ない」ということが話題になり、その後しばらくたって、村長さんが「こんな状態では村が寂れていくから、村の人が出稼ぎに行かないで働ける場所を作ってほしい」という要望で、何ヶ月後から続々と村に電子や縫製工場が、雨後の筍みたいにいっぱいできてきた。私は縫製や電子みたいに、皆が部分的にする流れ作業より、一人ひとりの技術の身に付くもんが良いなあと思うて網の会社をしてん。自分のもので、なんも無かったし、網の事もなんも知らんから夜も寝んとしてたりね。子どもにご飯食べさせてから夜また会社に出かけては仕事をしたんです。これ内緒やけど、本当は段取りより、初めは失敗して夜はほどくほうが多かったんやけどね。技術が身につくものと思ひ、こだわっただけのことだけど、今振り返って見ると、正解だった様な気もするんですよ。

## とんと昔の会とキッカケ

昔ばなし大学には平成16年より3年間受講しました。何かを学び、自分のものになりたいと皆さん真剣に学ぶ態度は高校生のように若々しく圧倒され通してました。年を重ねていて





語りの様子

も、常に色々な人と付き合い、参考にせんならんもんは常に吸収し、死ぬまで勉強やなあと思いました。そして、あちこちに友達ができ、話題を提供し合える機会ができた事が大切な収穫かな。その反面、やはり柳田の地に添うて昔から息づいているものが、自分にとって、一番大切な「良いなあ」といえるものだと気付いたことも、大収穫だったのではないかと思います。

公民館で講師を招いて語り部養成講座のようなものが5回ぐらい開講されたような気がしますが、その講師の方がほんとにまあ優しく、上手にお話しなされるので、感心して「ほんなら私が知っている話を皆さんに聞いてもらえたら良いなあ。自分の子どもや孫ばかりじゃつまらんし、もったいないし」と思い、同じ考えを持つ方達と相談し「とんと昔の会」を作りました。会の名称ですが、能登の方面、特に柳田では昔話をする時、最初に「とんと昔あったと〜じいさまと、ばあさまとおったと〜」という言いだしが多いから、そこから取ったんですよ。また、お話が終わったとき、地方によっていろいろあるけど、柳田では「なんばみそ」で言うげわ。

## 語り部への想い

前に新潟県で全国母親大会があったんですけど、どこの方も民話がいっぱいあるがやと。私らのとこはあんまりないから、自信もってこれこそと言えるもんはないけど、祖父母や、一生懸命教えて下さった人達の話や、耳を傾けて下さる方々へ伝える事が私の務めかな。村のあちこちへ、お話して下さるおじいちゃんやおばあちゃんをたずね歩き、1つのお話を何人もの方に聞きますと、それぞれ違うんやてね。最初戸惑

うたけれど、まずお話を聞き、話されたものを全部書き、それぞれ違う話の中から「おお、それは」っていうのが選んでいくつかの話を集めて、やっと1つのもんにするがやわ。そしてとんと昔流にまとめたときは嬉しいです。ただ、注意深く聞き、調べなければならぬことにぶつかることもあります。例えば「捨て子谷」と「子捨て谷」と言う人がそれぞれいて迷い、調べてみると役場の図面には「捨て子谷」となってるもんでやと安心して話すことができます。どの人も一生懸命教えて下さるんやから、ちゃんと聞いて、皆さんに正確に伝えなければもったいないからね。

## 語り部の活動と後継者

私は祖父母の話してくれた言葉や口調など、耳にたこができるほど覚えてしもうとるさかい、口演する時は全部、田舎言葉、つまり方言で話します。やっぱり方言のほうが親しみがあるといわれるから、私は努めて方言。あまりひどい方言使うたらわからなくなるから、ところどころ、肝心なとこだけ、方言をいれるようにしとるんよ。お話は覚えんでも、そんなにたくさんレパートリーがないから頭にはいつているしね。こんなお話をと依頼されたら、それに合わせてしゃべり方を工夫します。民話の場合はある程度歴史に沿ったもんを勉強せんならんしね。昔話は「とんと昔あったと〜」といえばあとは何でもいえるから楽やけどね。

語り部で話す内容は、聞く相手、年齢や土地柄によって変えますね。私はお話をしに、小学校、保育所、老人会、公民館、老人ホームなど、遠い所では、東京、新潟、近い所では金沢や羽咋の青年の家などに出かけました。保育所や老人ホー



ムなどへ行くときは、猿鬼伝説はちょっと理解が難しいから紙芝居にしたものを使っております。子どもたちは初め目をキラキラさせるとけど、話が下手なのかすぐ飽きるしね。そこで子ども達が飽きてきた時は考案した奥の手として紙芝居を使います。テレビ番組の「日本昔話」ってわりと大人も子

どもも見るじゃないですか。その「日本昔話」から私は考えたんですが、私は絵が下手なので姪っ子に手伝ってもらったりしています。

後継者の事ですが、自分は話の原稿をあげたり一生懸命なんですが、方言のアクセントが上手いかららしいです。

column · 谷坊さんの語りより ·

## 田の神様

師走に入って、風が一段と冷とうなり初雪も降って、田の神様方は、そろそろ、家のほうにはいる準備をなさったと。どこの田の神様も、楽しげにそれぞれの迎えてくれる家や、家族のことを話しながら、最後の田畑の見回りをなさったと。そしたら、村一番のおやっさまのこの田の神様が2人、藁におの上に腰かけて、沈んでいく夕日を見ながら、はあ〜とため息ばかりついとらっしゃったと。その隣の田の神さまが「どうなされた、お体の具合でも悪るされたんかいのう」と訪ねると、おやっさまとこの田の神様が「よう聞いて下された。実はおらたちは、家にはいりとうないがや」と言われるもんで、隣の神様がびっくりされて「こりゃまた妙なことをいわっしゃる、ほかの神様方はみんな、家にはいる時はいつきでもはように、春に田へ出る時は、いつきでもおそうにというところが」と不思議がられたと。おやっさまのこの田の神様は「家にはいっても、外におるほうがましなほど中は寒いのでのう」と言われるもんで「そりゃまたどういうことで」と聞くと、「広い立派な座敷で、立派な屏風やら、唐紙やらたてまわされて、外見は申し分ないのやが〜のう」と口ごもられた。そやけど女の神様が「野ざらしの田に、何もせんと、いつまでも立って居るわけにもいくまいし」と言われるもんで、ほかの神様方とまとまって在所に入られたと。となりの神様の家は、母親と息子の2人暮らしで、2人揃うて「田の神様、1年間本当にご苦労様でございました。さあさあ」と座敷に通されて、「おかげさまで年貢も収められ、無事年も越せます。どうぞ春までゆっくりお休み下さい」とゆうて頭を下げたと。

そして息子が、「田の神様、ちょうど良いお湯かげんで、どうか1年間のご苦労の汗を、洗いながして下さいまし」と明かりを持って、風呂場に案内したと。田の神様は、良いお湯加減の風呂でゆっくり温まって、また座敷に案内されると、赤い御膳が用意されとった。

お膳の上には、今年とれた野菜の料理が、どっさり盛り上げられてあり、小さいながらもおごしもついた。田の神様は、お2人とも満腹の上に、また甘酒までよばれて、いい気持ちで横になり、うとうとなさった。夜中に、ほとほとと雨戸を叩く音に目がさめ、起きて戸の外を覗いてみると、隣の田の神様が2人寒そうに立っとならしたと。

おぼけて「どうされたんけ」といいながら家の中にいれてあげたんやと。「どうも、こうも、家の中はちょっとしも変わつたらなんだ。おととと、おかかは、いつもいさかいばっかしてて、おかかと嫁さまは、いつも睨み合い、子どもたちは親のいうことは聞かんし、家の中はススウスキマ風がふいとるようで、やっぱり外の方がましやった。食べるものさえとくに支度しておらず、ぬるい風呂にはいるにははいたが、どうしても家の中におる気がせなんだ。本当にお邪魔やろうけれど、一晩泊めてもらえんやろうかと、頭を下げ頼まれるもんで、気の毒になり泊まってもろうたんやと。それからというもの、なんやかんやといわれて、次の夜もまた次の晩もお隣へ、もどらざる気配がなく、年を越し正月がきてしもうた。そして隣へ戻ってくだしともいえないまま、とうとう外へ出る日が来てしもうた。そしたら、小作のちょっこりばかりの田んぼに、四人も田の神様が、かかり果てるもんで、その年の小作の親子の田畑は、なんもかんも大豊作になったがやと。そして次の年も、また次の年も豊作なもんで、ちょっこしずつ暮らしが楽になっていったと。そのうち息子に、気立ての良いお嫁さんもきて、赤ん坊も生まれ家の中はいつも春の日向のようなもんだったと。

そして田畑も少しずつ増えてったもんで、これも田の神様のお陰と有難がられるもんで、四人の田の神様は益々力を入れられたんや。それに引き換え、隣のおやっさまの家の作りは、なんもかんも不作が続き、それに連れて少しずつ、身代が傾いていったがやと。そしてとうとう何もかんも、なくなってしまうたんや。

これも田の神様を粗末にしたり、家族が仲ようせんなんだからやと、在所の人達は、自分達のいましめとして日暮したんやそうな。



方言がはいらなければ面白くないという人がおられますが、「そんなにたくさん方言いれんでも少しいれれば良いよ」と、いつも言っているのですがなかなか難しく、今養成中です。

## 今後の目標

とんと昔のお話の場を設け、会場を掃除したり、床にお花を生けたり、お茶の準備などして、多忙な中にも1年間ほど続けたのですが、自分が主体だったのと、仕事が忙しくて暇がなく、やむなく中止いたしました。必ず口演にご来場下さる方もおり、「昔話のお話し会はもうしないの」とお尋ねくださるのですが、語り部の方は耳が遠くなられた人や、身体が不自由になられた方がおられ、そこで今は休業状態です。植物公園の方からもご催促をうけているのですが、話し手が少なく思案中です。お汁粉や、花見団子を含みながら楽しんでいただいたあの場面を、今一度目のあたりにしたいものだと願っております。

## 高校生へメッセージ

昔話なんてとろいし、テンポも遅いし、つまらんかなと思うんですけど、たまにこんな話も聞いてみてもいいんじゃないかなって思うがやてね。どんなお話を聞いても根っこには、神様や仏様は敬う心がなければならぬとか、お年寄りには大事になささいとか、宗教的なことばかりではなく人として大切なことが全部はいつているような気がします。だから心の中にそんなものが少しでも理解できれば、こんな世の中やさかいに良いんじゃないかと思うんですけどね。みんな覚ええといて、昔話がなくならんように、繋いでくれたら良いなあと思っております。

【取材日：2015年8月7日・9月26日】

## PROFILE

### 谷坊 貴美子 たにぼう きみこ

昭和10年10月24日・80歳  
語り部 とんと昔の会

輪島市町野町生まれ。幼い頃から囲炉裏端や布団の中で祖父母や母親の昔話を聞いて育ち、自身が家庭を持った後は自然と子どもや孫にも昔話を聞かせた。平成14年に公民館が主催した「かたりすと養成講座」を受講し、仲間と共に翌平成15年に「とんと昔の会」を結成し語り部としての活動を開始。以来、民話を通して能登半島の魅力を、地域の子どもたちや観光客らに語り伝えている。「田の神様のはなし」や「猿鬼伝説」「捨て子谷」など、レパートリーは50以上。



## ●取材を終えての感想●

私は初めて「聞き書き」に参加しました。最初はうまくインタビューできるか、まとめられるか不安でしたが、谷坊さんが気さくで優しい方だったので落ち着いて聞きたいことが聞けました。谷坊さんは自分で作った紙芝居を見せて、私たちにもイメージしやすいように丁寧に説明してくれました。その中で私が印象に残っている話は「猿鬼伝説」です。前に聞いたことがあり、知っていると思っていたのですが、思っていたのと内容が全然違い、怖い話だったので衝撃を受けました。

私は「聞き書き」に参加して、知らなかった昔の能登の話や、小さいころ何気なく聞いていた昔話などは谷坊さんのような語り部によって受け継がれていることを知ることができました。私たちのレポートを見て、能登に興味をもち、谷坊さんの語る民話や昔話が少しでも多くの人に伝わるといいなと思います。(佐賀香奈美 写真：右)

「聞き書き」はとても大変でした。名人に取材をしに行き、その取材内容を書き起こし、読みやすいような文章をつくるという活動内容でした。文章をまとめる作業が一番時間がかかり、大変でした。レポートが全て仕上がったときはやりがいを感じました。することはたくさんありましたが、普段できないような貴重な体験ができたことがとても嬉しかったです。

今回、取材に応じてくれた谷坊さんはとても気さくな方でたくさんのお話を話していただき、そのおかげでなんとか完成できました。また、今まで知らなかった能登の伝統や昔話、民話を知るきっかけになり、良かったです。(新谷果子 写真：左)

